

石井鶴三、《うたう女》と制作期 —空で作る造形法と作品主題の検証—

北海道教育大学
福江良純

近代日本を代表する彫刻家石井鶴三には、《うたう女》と題された特徴的な女性像がある。《うたう女》は、1957年の第4回日本国際美術展に出品された石井の代表作の一つである。不定形を成した台座と一体に造形された高さ730mmのこの女性胸像は、大胆な量の把握と岩肌のような粗い造形のタッチが相俟って、「立体感動」を美の本質と主張する石井特有の存在感を体現している。

その一方、「うたう」という主題とは裏腹に、高く張り出した頬骨、脱力した下顎、緊張感のある眉間など、この作品には、総じて美しい音楽的理想像からかけ離れたかのような表情の歪さがある。また、石井は1956年頃、自らの仕事に「習作期」から「制作期」への移行を宣言したが、「制作期」に相当する《うたう女》について、その主題が導かれた経緯、実在のモデルの有無などの制作背景に関する情報は少なく、これまでに作品と主題を巡る批評言説が美術史の俎上に上がったことはない。数ある石井作品の中でもとりわけ強い異彩を放つ《うたう女》は、基俊太郎や横田修英ら、制作当時の関係者によって石井の代表作と見做されながらも、その評価は永らく不問のままであった。

研究者はこのような現状に鑑み、作品を実見し、その造形的な構造を精査した。さらに制作当時の関係者の証言を新たに得て、「制作期」の作《うたう女》を総合的に検証した。その結果《うたう女》は、発声法の原理とその解剖学的仕組みの見地から、イタリアの伝統的歌唱法「ベルカント唱法」を生き写しのごきものであることが特定された。また、作品は石膏直付けの手法が採られていた。これらの新事実「習作と制作は別である。空で書くのが制作の基本である」という石井の言葉を重ねるなら、彼の言明する「制作期」は、対象の描写に主眼のある習作から、主題に興る作品制作へのシフトを意味する事が分かってくる。

人体を「生きて歩く建築」と見做す石井にとっては、彫刻も建築同様の構造的論理をもって構築されるべきものであり、作品《うたう女》も「うたう」女性の形相に主題を置いていない。石井は、発声法の力学を解剖学的な正確さのうちに構築し、歌唱に覚えた感動を彫刻における音楽的表現として実現した。そのことによって《うたう女》は、文字通り奥深い歌声を豊かに響かせ、人体の形象を超えて感動的な空間を現出しているのである。

本研究は、彫刻の造形表現と歌唱の音楽的表現を解剖学的な整合性のうちに統合した《うたう女》の検証を通し、「制作期」における石井作品の評価の在り方を問う。《うたう女》は、形象と非形象の美の形式を超えた彼岸を主題として結実した傑作と言える。ただし、それは石膏直付けという手法からも推察される通り、おそらくは特定の描写対象を持たない。生命主義を開眼した荻原守衛の《女》以後、ここには、主題の構造構築による人体彫刻という、日本近代彫刻史上に特筆すべき造形法が認められるのである。